紅葉文庫

五十波乃浦ゆ打ちよせくる白波のかしこきかぎりかぎりなくいせ
ぶりうしをのるゆ八波のうをきてゐるまかわとも
しらしるべもをうく海ゆうりに
かいつらゆてあ海人うりをはをばちや彩波人のことぐさ
海ぶきやをいはちづをへくもあらゆぬぐいあてくへらりかこ羅のやうに糸みとと
うて人もおのをつぶうきうら業いもぐむとろおばゆを聖中れ
海水もうみてうらいかなうむとそ射めてもくハ孝てうらじなど打あざ
めるやうなるをまうくはく世乃人わらくをなあ海べくあむ
一此物語は紀放ハ~~はまを~~將物語と~~いひ~~いとんてゞ~~伊勢物語~~とハ言ぞうくは
なる人乃名弾ゝ和稚出つうんうわがゆうし其由ハ代文う味のいとわ
うしかりけるを云て云の條の注う~~伊勢物語~~の弦角孔考う~~はまが~~
~~物ぐり~~らふハたぐうけふみをうしゆ~~稚おゆ~~~~はまを~~將の日記う云も考
く海~~井~~のみをうけて一つるをいへるれバ日紀こハ既うてを海物ぐりと

日記

言を誂進る詠べしこゝろを作りたりし詠て當時某才のうたに在五中将
在中記又在五が物語などいへるにつけて行末其の思ゆるしけりいふらくの
物がたりがきにハ其奴之乃世の中の主と成る人此名をもて題とせし例なれ
竹とり翁をはじめかぐや姫俊蔭あこや姫力自方のくれおちくぼ
狭衣光源氏など様々ありき又かの語又在五中将の物語と云ハ其比
までハさ法なきも有しかバ或説り在五中将の物語此餘まおちくぼ
記文集てふ物もなかりしにやと云も思ひて思むなし記するし言ハ日記てふ言さ
事ハ伊勢日記かげろふ日記とかいへる物ども有て飛鳥の名をも乃記して写し云又
ハ伝へておのが上なる状どもを年月の編次乃さまに記しゝバ此もつ
く男云て條毎すひおくせしとハいへども実録なるきおもへ思ひより
業平物語ころ日記乃辞なるを古の名づけしるハいかにしさる思ひ
是ハおのが上又ハあるまで窺り世なありし事どもを古ひつゝしなきつ
時をちくかりて書れ題なりける云れ名めしなる物がたりとハいかいつけ

しるやあ説伊勢物語て云名も源氏乃絵合にまうりハ世物がたりの在五正三位
を合せてかゝ言ひはやるをもとむるを見るハ其の事のよしを記して見れ
去るをもて此文作りて去りらくの世の名ありなんとハ言いさまを記く
乃人ハ去つのを缺ぶるとなきる由をかはず伊勢乃宮ハ特の使ひい
きちうり歌もまなりらる人と定め年たる物語をいろもあるまじに
作りなそしうまもしろくして伊勢物語ともいひちゆつらん例ある也
在五物がたり其名ハ忌進にて其人もなくちん来にさるまじくかり
加茂の斎れ事しく論ぞ行し此中の主なりける人を恬子内親王れ
此事と註けつ云ハあ中すらみ所の周末に西とてこまるらまじかハく之云
語人の此皇女をまゐらせし名を物ふさかみやらへき二つ又文徳天
皇録す第嘉祥三年七月九日恬子内親王為伊勢斎内親王慧子内親王為加茂
斎と有て又天安元年二月廿八日廃以斎内親王慧子更以恬子内親王為加茂
為斎内親王遣右大臣藤原朝臣良相於神社告事由其事秘無知之

者や。この加茂の斎王は病ゝ重なりて、ふかく初めたまへるいきち
ゝ、ただ祈りの言葉世ゝにあはれをかけ何をかいはん然れども彼二条后の
密夫と云ふ説ゝは、なほ所も尽くめでいさぎよく云べうもあらむとて思ふ事
なん乃放逸なりしゆゑ、この時なりけん
多の出来につけても歌ゝ論ぎゝれ
しかるに、この加茂の斎王の病ゝ重なりて回じ時のなれ愛
言葉やい朝臣と相うつれ歌ゝかたらひ給ふ歌院
を十ゝ出でさせ給ふ。もし其由神うき告げさせたまへるものゝされど
河ゝ わたりしるを行ひてや何の病ゝも世ゝにあはせ給ふ
京言べ乃きゝ歌ゝ者てよりどひさゆめけるを抱てけるゝい
仮りなきゝが狂初ゝ歌ゝ紀を抱てと抱んの多の世ちぢら
もはぐゝうて賀茂乃いつきを伊勢うかゝりうゝなどてあゝめさゝう
紀者の切めるを世の人殊ゝ彩ゝ歌ゝて伊勢物語をひゝ乃名やもび

けん伊勢の斎王は行ゝきうゝ行ゝ歌ゝふ徳法和の御時ゝはあらぎ
しかば伊勢は行ゝきとおなじゝ実事なゝめ歌ゝは歴史に考ゝ且近ゝけ
世の人も大ゝに知ゝんものゝそけてもむ業平なゝめ歌ゝ知ゝの伊
勢なゝめ歌ゝ物知ゝ語ゝ歌ゝは彼業ゝ有密事ゝ放為孫修業ゝ
もは所習なゝべき歌ゝ歌ゝ古今ゝ多歌ゝ系は人の中に朝臣の歌ゝ
まゝける時ゝいつゝ歌ゝ高なりける人にてゝ歌ゝ詞も見
えゝれば伊勢ゝまゝ歌ゝは歌ゝまの歌ゝありきけるけるゝ
詞も詠ゝべゝを歌ゝいそぐ古ゝん集もゝの本ゝ業ゝの歌ゝは物語ゝ
様ゝゝの本ゝ場の詞乃ゝ歌ゝ紀ゝ歌ゝれば大ゝ歌ゝは書ゝて加ゝを補ゝ
せゝゝ歌ゝゝゆゝゝと我為のゝゝ歌ゝて此伊勢の歌ゝ
いゝゝゝくゝもゝ歌ゝば且は歌ゝも彼業ゝ歌ゝは物語ゝ歌ゝ歌ゝ
乃ゝゝこゝめゝゝゝこの本ゝの歌ゝゝ歌ゝゝゝ歌ゝ歌ゝ
ゝ業ゝは歌ゝゝ故ゝは在五中将乃物語ゝ歌ゝ伊勢乃知ゝ歌ゝ

おかしくて伊勢物語とハ志だらくのなり云葉しけんすおぼゆ又
和泉式部の事と云ハ伊勢か撰集の時を初多く出しとうきをもて其事
こまづくいふ人もあまてども一時の人乃稱云につきなどして是つきあくまし
きや侍んらかくり初冠の條をはじめさせん事本徒いなれるべきを
わりなるさて業平朝臣の事此物かたりをより所として世のなかきを人にいひ
云あしハうけかたれるもし源氏の弦合此物語乃ことをいへるより世の常の
あて云ひ引つくろひかざれるにおさまてそ業平が名をやうくたへてなかり
あるとおもひてにや或物の在中将の論と云物に國史稱體貌閑麗放
縦不拘舎是宅無所考又云至如其好色淋芽不脩世固病焉然觀其
世宜嬉是競貴遊子弟乗詭垣望復閨握手無衆目眙不禁則習尚
之使然也乃病其風俗乎可也矣獨責在中将為嬉首哉昔司馬相
如自作傳叙其臨邛之奔且文辭靡麗不為行蔽古之人乎亦不足
怪已後世刻剥之流好揚悪徳令古人無所容足則莫取諸風雅和

奇者流家傳戸誦而不問其人可謂厚矣この論実にいはれたりといへ
とほしいまゝなりしも文徳の御代乃あらはれずして清和の御世となりし
比ハ身も脩まりしかバ官位もすゝみて三代実録貞観十四年五月十七日勅遣正五
位下右馬頭在原朝臣業平向鴻臚館労問渤海客是日客徒賜宴とあるを見ても
知らる又玄乃ありし庶族の任放縦の人ハ決してさるべからず又此日の事を
ハあん人と云後照和の様びなどもあるべしさるハ翁乃略無才学とあるハ国史
の言しるべくして無ハ有の字をあやまりしものとそ思ひても貞云まで源氏
乃物がたり業平が名をやくたへてまいふ文の義をもやすく竊るべからず
ける

一 むかし男うひかうむりしてならの京春日の里にしるよしして
かりにいにけり　此いにけりハ古本に往の字をあてゝいきけりとよめり
しならん又いにけりとのわれなり言ってつくしとある思ひ鋲きて所
へ移しゆくをいきけるとハ云べしいにけりとてハ文をちかきてなり

古今に所々注のまをさるハいとゝもをゝうけたまはりてよむ
ありこゝハ心ゝよけりとゝろうちもむべなる
一ゆひあらバ露の命ゝ露も云なん云々さる万葉集ハむしけるあるも
行きんやくむぐらおゐへるゆ屋も妹としきゝ云を拾ゝうといきゝ
ひ見ゝけるてふ所ハ古今記乃神武ハおゐんゝ芦原れ走々きゝ
者ゝ三ゝやさや者て家二人初しゝをしを撫しるものゝるべし
一首ハ上乃露を見ハ行ゝとなん男にひゝるをゆゝゝゝこゝゝ
ふまゝゝけ生バおゐある所ゝもゝゝで　けゝこハ行ゝと男に向けるを
乃下ゝ行ゝゝか詞ゝ乃二句ゝゝゝ拾ゝゝゝゝかくてハゝ
ゝゆゝゝて泣ゝハゝゝる人ゝの家ゝを考ゝゝゝゝむゝゝゝハ露ハゝゝゝ
るを加ゝを添ハゝゝも里ゝる川ゝを言ハ枕ゝて云ハゝ
ゝゝゝ露の光乃彼ゝ此所乃露ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝめる状ゝおゐゝて四ゝゝゝゝゝ者の上ハ露を雷ハ

光ゝ見て露ゝゝゝゝなゝゝゝゝ時白ゝゝゝゝ四ゝど家ハ泥ゝゝかくゝゝ
のゝゝゝゝゝて四一首ゝ八ゝ日ゝ者ゝゝゝ繼ゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝ所ゝ所ゝを拾て詞を作ゝるにもゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝ者ゝゝ添ゝゝゝ繼ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
上ゝおゝゝゝゝゝ露を見ハ行ゝと四ゝゝで八神なり西洋ゝもゝゝ
ゝれバの下に泊ゝおゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
を家ゝゝゝ者葉のゝ露を西ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
地野ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝにゝのゝゝ四ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
四ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
乃ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

なるべうなる女ごろとえばいろよみ今昔物語に業平朝臣と男こ
嘆きしいの山斜なるるるるにたきりたるハ玉ちの涼流りるいかりこにこのの
ちりなどるるぐるかりしるるとおばゆさてたくれうるるきに二条后のいとと
乃女御の御ろおハせるを命るるる出るりけるを兄人ちれらりるるし殺
るるるのもるのるるこにいるつるるるるあるしうばるるにハきかるくるんれ業平渡
に業平朝臣盗二條后宮住ハ前将来之間兄弟達追至奪返うハ時切
業平之本鳥云云仍生髮之程稱見歟枕草子云云この書ハ実と覚
もるるるもそ知るるれ口碑ごもをかしさるにきるるるるれいばるるうるる俗
ちり所るるるすぐるるるどるるれいでるるるるのるるるるるるるる出るく
本文をいるるるざるハ拙きものろ
一ハつ裕乃圖或人乃補へるるれるるるるるかくぞなるるへるハ男ゆ仍て
るるこ出寄

縱横八渠水或由而
入鳥或由而出鳥大
抵出入各居其半也

澤

一かまひい幸法うゑるかち飯をほしうらして行旅う携る糧なる俗ゐわ名物スノ
ハ餉をかまいひわろ海とも又俗ゑ云かまひとようこ又糧をほしいひうもあり
おく云うほすとうゑうとハ同ゑなるをや餉ハ自家而之野と云ちふゑうて
孫乃糧ゑ乾飯う借ゑうて字ハあゑうで糧も乾糗也と訓て米麦を熬
うゑを搗ちうハ共ゑいつで御国乃云語ハ字を備奴とゑてゑろ訓ぐきと
云ゑハ寫し

一時ハ志ゐ　時代の山ゑ敷波乃河ぎりを剪ゑてたゑんうゑハ夢く
けまで波ぎりと云ぶ即河ぎりのゑしとゑんいうゑや男ゆ就敷波の河ぎり
ハ河乃流れ海う入ゑて云ゑ俗う河ゐと云ゑ十九日記うゑをたぐ乃ほど
ちゑ知ゑなる波ぎきく川ぎりう入ゑを省をもゑゑ作りきちゐく波のかを
て時ぐきにあらとでこいたぐ波後ゑて波き知ゑ磯ゑゑ作て来ゑゑを時ハ波
ぎり乃といふゑ云ゑにおよぶる波を磯ゑゑ作ゑうもいろ波りとちゑめるで乃ゆきち
ぐごにもあれ海へ乃波ゑおよゑる考ゑてたゑうとハ世ゆぐきぐ作ゑを

ちり作ゑハ乃波詞ちれば考ゑて定めぐし　近世まのきのむへのまし人乃ちれる彼むゑて波の孫ちゑ波ぎりと云ゑ

一ゑいなは人ゑて　古事に直人とゑて正乃ちゑて人と云んぐとしく
かまちり色常偏乃義ゑてたぐ人ゑ人とゑも同じ色ちつゑて云家ゑなハ
云もたぐちゑはねゑと云ち回ゑるぐし常の服を真衣ち云ハちゑ又面を云ぐ
しといふも賀朴をすなハとゑゑるも物ゑ作ゑはゑて常ゑ作ゑゑ人をゑし美
衆乃ゑぐ作を方襖考ゑゑハ大なゑびの神生ゑゑも大神乃ゑぐ
き常になゑちをたちふ祥し神幸さはちなく殺りて神部が寫ゑはく
所と直相殿と云も物ゑゑて常ちなハゑちこび乃寫をなす名ゑ
きゑハゑ作を用ゑちゑていたぐに常にと云ちゑ作ていまぐゑちゑ人な
ぐ用ゑちゑぐし義のまぐ考ゑにのゑちゑ作しハ考ゑぐ海ゑちゑ作ゆ
一三ちしのく面面社乃　或人云この二首社おちりちゑハ古今六帖う居
の寄に入ちりゑを心記者社ゑちりと寸ハいちふと一わちにハ志ちゑ乃
べか作ぐ又作りハ彼六帖ゑ部類して出ゑるハ物を乾してゑある寄のちちゑ

物語に世興してあるをも他人の物語て其物の始末つたれば此の記者れうありや否
やいなやうきらきらどもいとゝらり物語つたるとハ云べし今世人世人のむ
すめよ撰しとて紀氏六帖とゝよくどもいうけるをめるすにて寛和乃比の寸
女乃多に成しる物なりんうを高津の阿署梨 東冲 おいもりけるハ年代乃前後
をもてもおかしけれ所べし

一 ひとゝ所しを古年こ誓のまもて義を先
うきゝ、この事ハ明らし或人ハ心せゝしらを云
ゝを約めるとゝりさけど前いひけ乃語て古ゝうあゝびこゝけ
をおりハ義ぶよものし又源氏物語うるもとゝ所ゝさゝうり用ゝ
も所ゝこゝろえぶよゝ語しいづをいけ乃修云ゝるべし

一 ゝうゝのを百濟敬しゝゝ流ハ大ゝの人 諱なゝべし 或流り 東国乃方ゝゝ 都
をゝぶとゝゝけゝゝハ家敬のゝ敬しといへゝを前ハけづをにても家をゝぶとゝゝ
なゝをハ流の引ゝゝこゆゝゝれ流り凡乃此ゝうゝぶも流ゝをそ流ハゝを行

りこゝ所ゝゝぶハ磯べ乃屋ぶの赤などのるゝてあゝ乃ゝとハ蒙の上略しとハ
も共りいうるぶやはゞゆ芳をゝゝとのこゝし例ゝりやゝを是ハ行ゝみゝる泄
源藻を行藻とゝいあゝぬこゝ所ハ香青ゝるも行ゝこゝるも法又風ゝ此
うせゝうゝをゝ云をなぶゝこいかゝゝぶ物てふ名をかゝてゝあれハゝゝり引
ゝてけゝでいえゝゝわりかゝてゝハけ類ひの所に多し行るをゝぶと云ハ古
ゝし方蒙り外の花ぶしゝる面ゝり又ゝぶこゝを行網山こうけり
栗原乃ひゝ和氏松の人なゝハ 或流り古ゝ乃ゝゝ所ゝく所りをゝぶ所
こゝの小蒙氏人なゝハ敬のゝゝにいぶをいゝゝし此所をゝりてゝうゝゝ
とゝりゝ松を人なゝハとゝ云所日本武尊氏御所に尾張りなゝにむゝへるゝ小
海の磯ゝるひゝの松吾兄を一つ妻人にけりをハ太刀けゝしを衣きせゝゝを
古ゝ乃所ゝゝ是をゝりてゝあるなゝゝ

ををゝりてけゝゝゝをかゝぶ是ハ 或人この所古年に十、五四ゝ
とゝゝるハゝをゝいてゝゝハゝゝゝもべしさてハ四十年乃年とハゝゝぶ

ぶつとなつり古年乃きさあうこのことなくぶうてだを皇こてうこう法ぶきの
咱うろ仏ぶまの法などいすづて用じぞろあ法さうろこふくム年にゆさり
なるとりあとそきづてよ知うきてづて翁いちうけるり

一 男ぐうけし　こけしい御男衣し古年紀日年紀ぶう名誉をうけ
しとよりぶ盗うを御とうしの乃乃ぶしの仏うて脇翁しうけしいろろ
衣をうといひ志といふ法衣衣を法男衣などいうろと志とかるて
うなんうるい考のるし

一 男志くそよみううこけり　古年に不知陵計をとをつまてけ男
ひ男乃法ようろも志くぶこうて年きなるの抱ぶうしくく人ありこも古
年い義まなるぶし女乃なるぶうしき出発てきうぶ京してこしとこい
両志うし又男法乃女ぶ男を志う業い抱志ぶるにわよ地とやしをいぶうや
きぶいたぶ雲れ枝もあわくに陵うるるをそちうぶるいにおいぶと
ひうくいけるきるいぶうるくるるひるうたうてをこのむてよ名う

形ふ人乃はもあうあうなるにうきうといかをしに志てうぶくおばゆ

一 ちぐち　ある人御達乃流いうろし古年に咒達とむるをこてちうもべ
き酒とくるる宮一古志ユい男女うもにてると稱ふうの其一ことあげん
男にいつぐ子蓍ちゆく日年へへなるよ新を初るいたの子ろ女をこいい所
信乃市流うあしし子おいもこ乃五う菜つる寸子など形多しけて函
史ユハ志猫子方薯子又皇女乃はる名ぶとなるぶ仏ろる女房こちこも形子仏子
などいと多しひとり伊勢い亭子院宇多天皇乃皇子を生るつまくバ大和抱ろ
伊勢おうやすを所ともあるるつるて仏を乃御を稱ふすと人うなれもてど芝
も出羽のる義狭ぶ子かの仏うてもぶめ帝はめうを出ぶりしぶう乃名ならんユハ
い勢めるるるびしなるづくおばゆう法ハナづて臺名と云抱うて々形もうる
うそうぶともうけ紙いる妻女を稱御と云ハう仏尺ちるぐし紀御京づ人人
乃るくにてうろあう兎

一 出ていなぶ心うるーとうひやきん　ひ生ているしハ女乃人志を抱うを

に依て家出をもしもやけ泣うけるくおぼゆるハ次の詞をよく見れバ男
の出て去しところおぼゆれ此女かくあるを見て云られ出ていにし女の
出捨つるところハこの女我を背てよ又しく文次りいつゝおもひていづるとよ
もとめゆらんとこゝり出て尤え右兄、ゝれどいつこをけふともおぼえねバ又
りてそこハ深ま悪れ肉り害ハまて戸かを去らぬきん方子のなれるちう
ぎや又此女いとゞくゝ去て思ひわびてやありけんと思ひ出けるとうをきおひ
て云出けるとよまて出てゆきし女の方よりおこせたるとえくゝらぬ詞
なぐへうるらひやりけるとよまへてりて男を恋て歎んじつびりうらえて上み
詞どもゝ能うつりけて此男の出ていにしをいつよと思り契情乃说のごとく
この条み読の詞りおのが世くに朱てけれバ疎くなりにけりしと云よ去へし
ちぎれ女の方に男我依て去ししの此男ハ才まゝしくて愚なるよ故女乃説のえ
けちそうちしうきさ人の子に騎きんとろうるをゆつけて我才のいふがひ
なまり世をうしときへおもひて出ていぬバてふ言をとうえておもふて

去けんを女ハさるゝことありともまゝゆるさらいバ動しうんおもひるべうようするも思
えのみバ依てよりてうて深らんとおもふあひだり去る母乃親男我いにしを
とゞまらすともひとくやすくけるゝ云去へし谷なるべしさりけれどかつ
うにおもひハちぎれ夕中なれバ去みびくて男時しかもきつひうるも深う
深く恋ハいとゞくつうかゝるしくて去し昔より強くおぬきらくをつひ
うハ親乃こと男を阿ちするより遠ざけられ男も又かくてありちたべ
うらみバあと女に依ておのが世くになりてゝれバ疎りうとくぶ朱
にみるとあつるまて男我出ていにしを去しをするものし
一 忘れんとおもふ心の深くうらふ　くの本にハ忘れなんとよまるゝ
歌人さてハまずれんとおりて男れ去おきまり此哥古く実にハおもはれん
とくあればさ深かりき深く云ハゝし　古本に忘説とくあつるをわすら
んとよみて我心ときんとすや　あのとまへバはゝ向乃心となるへし
一 ねまかおつらひしける人乃子ども　後りこハ京れ片あとりて住かの

物ゆゑわか中へうちひつて世わたらひすとらへりこハ大和人乃河内へかよふ物かたり
りなりとぞや又此物かたり物かたりをバ大和物語とハ昔大和の国なる木の歌ゟ
書をとる女ありけるこそ見えけるさま京れかつけそうりう住とハわかうるか
わからひて文詞りふとふるまちかしものともはや大和もこれハわか中なれ
ど又ゆかりとこら他国へゆくをこくにハ云るべしさてわかうかとハ田居之所てふ
出田を上略して云るとぞくり此語ハ万葉集り（ちかうハの家を造あらたむ時）昔こゝら影波
わかうとハちさけめとるゝられバ古き語なる事あるらし又田居ハ国集り（久仁の都をよめる歌）わかうての京
大君ハ神にしませバ赤駒乃はらばふ田居も都となしぬ抔よめり
田居之所乃義なしバ田ハ略きかてをかきをちぢめて居なかといふなる古
ことも抔ばえず田舎と書ハ義字にてわかうかと云義ハ他ゟあるべし学者よく
考べし

一龍田山　万葉集に白雲乃龍田の山乃瀧の上乃をぐら乃嶺とよめるハ今乃くらが
り嶺と云ざいるゝ人乃立田山乃小倉の嶺なると云考へハ前り高津の消ぎ

楽乃あゆからむしを出あげ方人のふと考へがもいしハさらりうしろくらがり嶺とよぶ
ハ河内国乃河内郡より居り龍田ハ大和乃平群郡にありて東てくハ龍野越とも又
亀瀬越ともいへる坂路也しさて乃西ハ河内乃大縣郡也山脈ハつゞきて行どらち
あひぶり高安郡ハ存て信貴（しぎ）嶽（井の）十三峠川なと云山脈つらなりて山東
へこゆきバ龍野乃里にて山ハ大和川乃北の岸にならり小倉乃峯ハ此山の一
乃名也大和志にて云小倉峯有二一ハ在立野村西一ハ在小倉寺村上方二の立野村
乃西と云るいうくゝ乃龍田山の小ぐらの嶺なるべしうてを瀧の上といふハ山の南又
（はな）
谷く流る川をくハやくと川といふが即いうゝ乃龍田川也大和志り龍田川ハ自
廣瀬郡流経勢野至立野村西亀瀬入于河州とあるきりこの亀の瀬とらふ
あらき岩むく（のりくぞ）にむかぶ瀧つ瀬なきばらしを瀧乃うへ乃きくらの岸といふめり龍
田乃社の風祭乃祝詞り社号ハ朝日乃日むかふ所夕日乃日がくる所乃立田
乃たへ野り社宮ハ代ぶめてとこゝらり山乃東のふもとより天津社国津社祝
田彦かいくゝ姫乃社ありく乃龍田の里なるハいうくゝハ行乃社しと並河乃うち

きくさへかりけるに高安乃郡りかよひけんハ龍田山をこえて小路くる程もち
ら寸路ゆ来り高やす郡里なとしもよめり生駒山ハ其わたりなるをわしれ
なき事なるこの歌なくてるまありてハ秀くしきよしも生駒れハ大和乃方を望ミやり
まひ給なくめらるしとよろ云ハ万葉乃歌を捧よりて作りしかいさしかゆくの河も
ぬ雨ふるも物なかりけるにそ

一 梓弓ゆみ 檀弓　梓弓こハ弓を持して神をもて入りて誓ひきこえ
奉りし上の巫を云出てはて弦ならし神云の史みれ様を見きなきこえ文ま
神を請ひよせしとか神事ニを我思さしにやえらてうゆ寸かとしく云謂ハたちまち
傍ハ说云を弦めてのへる事又りも家にも多ゆら神云をかたてくらみし傍有
やいさかで見えらぬ神功紀ラ時得神語の詞あり是を古事記ニ見ゆるハ請神
之命ヲと出り合まて共ラ神のみことくよもでけらはてく孔誦りハ引のことし因
て梓ふり古事に神言をおしハ義もてちりひとらきて家ハ年月をも包かちか
ひきし云れきるしハいかなる人せるとらもあるにハあらねれさて上ニ梓弓当

らつきにちかなくしハ詞の豪なかるら年を経てさらに縁もかくらぞこの歌ちよ
を云ゆらひよちらせしるとハいひえてらず女のちくにこころ梓弓ひくらひくの
かく云へにいなさるるとも心ゆき又うるいしと云り忠の字ハのくるとめぐらせて
も延喜しこハ誤字なぐくいあらぬの義云比之を故ハ依字あなりしをまば
らく孔楽り書写にハ出仮めしならんと書改めし人乃心よりもとめなりへに於ては
きつく又の詞れ人乃らことわりへるさいにもとれ文とハ変りてにな是る有しも
ゆくらぞおほゆれ比歌も其数ラ入べきもの也

一 袖乃浪渡のさわぐ哉　是も浪渡をなまつでもみなくしもとほる
一 彼こさりける男ゆつけて　浪まくこ孔事にハ立ゆてとまさてもよしとい
ちれし女乃手あらひれらひなどする時のり一枝来てこぬ男れあらかり
来て立ちてなむをけへからはさてハ古事にきりつけてとあらかよ枕
一 いきしへ乃倭文孔をくりかへ枕　或説ニいきしへきてしハひとつるへしそハか
くハよむべからずとらへり古云 学ばぬ人ハすべてうやまるを於くべからく

しくりいまくとハ是まし方をうしむうしハ古き世の事をさに対へてある義なり六義乃歌をうくいひたるもの也文偶文識ハ乃縦横をいふなくすにも文なせし志ま織こ反乃うしいち作くり大麓乃古事いあるうし物乃其さる事をまて見ど作くれりそれ世す浮織と云物あり色を駁しもなくし素きにもなくて横文ハなくてさるのにもして糸すぢを浮沈まし文有あり浮志まづむ乃反対なるを云されバむかしハ沈織といひしづくハ浮織ときぶうあるあとなしるりあるぢうるすみ陀いでぞう云のえ

一　紀の有常がり　許の字かりとよむる　妹ぶりなど云例あさうてし濁音の例有常ぐり妹ぐのぞなど同じてにをハを論ぜしてハ濁る筈のうりとつぶ数ハすくしてかりとよむハ常のとくしさて人乃許をかりに云語いるある義ともやうろえまぐ新井白石乃云へらく佐西乃古云許其事す八三韓乃方言も同じかる乃数をこうるとごを云こといへるりと云この類猶有べしと指すりさるるあまくおぼゆ語を難く人こてに辭すべきよすも

一　ひくひてを詩つ句色の句にかかる詩　或人云き陶氏愛菊のうち色に見て事の句とよわらぞとつひて猶餘ありらひて少ゆある人の詩り敢　せうり　あり残んる首まじけきバ共にあるべてとるふハ世をいうひて或ゆうすきバ愛れらるろなくがふべこハ古事に厭の字を書るハいとふとも飽とも足とも訓する字なれバ世をいとひ身をいとふなまさてハ同義となれど其語の本ハ厭しせをも身をもいとふハなのが憂なるさもと云義なるを轉じてハ身にも世ニも詩文あてなる拠りきとゆるさは仍て乃忌ハ今ハ厭ふくいとふぢくろの中なくらバ此弁れも難くうしじを　ま八なりくひきまりなぬなより於ゐて思ひうらしまりもくる日乃わくれハ恥しさと云之志ならぬくの六帖りといひてもと戴しハいうくと紀路ぐくなゆゆる年乃出ていふるる行とも雑えるなきこハ語りゆるなし誤なるべし

一　なゐぢり　或人直手乃字ぬくしにゐしやるぞうのれ義しとのへるハよろし

一　いとどつまこ〻ゆあひり夕ハ遊びきり　契沖云此事記云天若日子

たゞ外りしに父母子おほうなくして喪あを造りて日に八日夜に八夜叉遊やと云こゝ四ぐくまつの所業をおやめて捨ぶくとつらまつに捨ぶこゝ絶きくこゝろ捨ち遨遊とつけ遊ハ逸やうに云ふにあらぶ云に能うゝ人ち物ぐちち年少もてするるを捨ぶとうくとすなるて公年をやめてなけるを捨ぶこゝろ

一こちむら人を怨ことて　此贈答乃はいでぶ乃年も前乃わきなく

みぶりてえゆゝ試こゝろ改也

考孝子を十づ十八黒ぬもおもいあ人をなをこゝもめこゝハ

こゝろうれハ女

行水ち表ゝこゝちもいこゝ松ハ男をあ人をおもふならけを

返し男　此年ち又男と

吹風ち去年乃梅ハ苦ずもめをたのこゝが人乃ちく袖去

又女如、

朝露ハきえのちても有めゝ袖ちこの世をなのみちつゝき

あゝこゝろゝかゝこゝに去久法をこゝあ女乃去めびありこゝしけるるこゝろゝ

恨ちち此歌いこゝ所ちこゝうゝどかめて女乃こゝ人ち人ちいけしこゝ

ゝ乃あ世ハ好くて好ちいあ人を男ふ知ハとうゝみこゝ世ちこゝかゝかもい

こゝかゝこゝ世ハこゝ此男乃あこゝに君ひありきすこきこゝてあ世ハ男乃

ひおこゝこゝ袖をたくちおこゝ袖こゝて乃世ハ袖ちこゝ家ハ男ハあ人を紅む

ちち袖ふしこゝちこゝおつきちちこゝ人ちつ世ハ男ハこゝ長くなりてこゝふ

人乃心こゝちなゝこゝかゝこゝ人ちこゝこゝ松ハ男ハこゝ長くなりてこゝふ

此こゝハかゝこゝて在経る世をこゝちたのこゝこゝこゝこゝハ人乃心

情を飾こゝこゝ人ちあこゝ世こゝ人乃ちをきこゝて人乃ちをやこゝど

涙こゝ今の年こゝゆくこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝ

こゝちこゝ方こゝ行こゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝ

こゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝ

行水て流るかゝりて うきや色とさかりて あらう花へ初きし姓ら
わけゆきる歌と黄花てふ哥八古事ヲ栽ざるなくらむらくる世も
ありしく良哥乃言も おのゝ歌み老わとらくゆくをうきくうて男
女乃あふくら人に八似く哀ゝきものしけて古今ヱもけりで乃旧にき八
其の人々の本に標りて改めしなるべしこの条つたり なけりてら紀
なすとも今みけつで乃さしにてハそれり逃すべからけれてあつくらべと
ハかてくまかの心あるをつひきうふらみくに八あらく 黒卯 畫水 落華
朝露乃あぶ物とく云きらひしをまつともわば由

一 かぶりちう紀 人らまく真こも刈君八沼まつとお有つらんを很りふ
らむあゆさち本もて宮作くしつとのへり永津の色つて八節の茎も
てまづ苞こさて上を蕨の菜りかさりなし茅或八蘆雀なとゞ乃茎を
もて纏なのをハ茅纏乃名むるしつらすとわすふを行る人八枝八西
色の条りて手くりすきなせし物をとえり

一 通からうれる定うるしめを今ハむつし人なる奈名ハ雅言のいつり
しハ六帖まハ藻の数りけるで、是にしも出まつれし言ハ其世スハ人の
識らす物なるべし藻くさなどりつまて小海乃ごとくなる物とえる
にゝりてわも人ハ浮藻りつきて小螺蛄牛なとのかつちしてつく小やう
なる貝ろすむ也其似なぞり化する時わのいの殻を挽出る物ありさ
こ物の中にわみ其殻を破て出る物破殻虫とハいふれとらへう
さる属の物乃中うさる差ざする八おの色くくの稟えたる性のましにて
をを怪しきこり多かりつまし人乃人採めて奇にもちうけん物やうくとうりや
さぬせとなりて八そも有なづらろわと招す人もなく名も称くつくりてあら
るさじき物きてつらル木つなわふきる乃類あらひく納んとするハ益な
わりつし

一 昔常両色ごみくなる男　この条の字をもしづくにつきむすん中の手
申ずゆくふたりくろづまと言も詞をなさでるし作ん書ありし下の除く

世間と言てよろづの事ども人を対へ言ハ業ハ学の作法
はてしらぬ乃ばかりなるもへる欲且上う世の学をやなるらんとも思ハ
ずの乃そう後づきて名聞ハ男ろをかくうてハ名を聞さてうぐの作法
名姫ときて名ことおもをふきうるみるもあるべ世の中おもひ者ども云古
いもせの情を知ろうつへハ同じきてし又ハ臨うう如を異とりへうし拾遺
ろを乃者も仏説より指来ものと云ハ恋むべ説こ又すべ説ハ学者
義字ときて或人業抱ときて名孔業うこもるるよりとりうさらハ業髪とて
ものうるうるとそもべ説を教ハ名自ばけてうれまに
いうるうにもいうまて文れるひうるうるもうう延云約云ハ作法の
ろ重乃ぬ用なし及切ハ西土乃音教の梱様ものに用ひておのづうサ
ろのあり合ハざるるあううれうう姫むも一つ乃作学ろべ
一つとうう　名茶紀ニ厭乞戸母作う戸母此云覩自ろうて
幸作ハ用べうし戸ハ家母ハ女あるべ乃ぶうて人妻乃称ちうう世孔

作ううちうべと云ハ家をうふ義ろてうくやううをけ文作孔ぬべ
りぶにつへううべと稱へうる作の主なるのううハ刀鳥乃者めうにうう人
紙ものうけ作乃俗作しうをもつうべうもべううれべ主作なるもや
一涙のめうきめ　けうう乃家で乃作乃後撰集孔物をうていのうりを汚衣
ううう昔い説いきうとを西うんあうう云乃ぶべ山うう松のべべ衣をい
うて神楽をうて社う奏するういつうるめ人孔うぬハべう千る赤
いつもまる人乃ハ乾ぶ赤と色ういつもうを汚べめとハいひ作ものを人乃
つうけるうためいうる流なまで行てふ古事に出ものもまるうれ赤作学
乃ぶいうべ乃べる所なまバ毛西作を考うべ作うて古年う作延治衣將若
うう云せうをうれバきんうべうとうむべ作べも哥乃をハ同べ
一作べも物　或人若拙小作ういうう吋作べもてふ物を乃き学
ある藻乃学朱う寄生ぶべべなる物ありうを作とうて乃をハ世う
ふ作べもし作ううべうう考うこと所の乃乃ううめうう

分乃海にて物見えける老たる人乃髪乃末みえたる所かきけれ
ごとくハたとへていむすさましきものみえたるハたぐひなきも猶ともやよびけ
んとの俗カハもろくと、なべてあらぬ事なり
一 さむしろ　延喜式ニ廣席狭席長席ニ見えたるハせばきむしろ
と云注とある人の云もよし
一 はじめて　初時向（はじめてむけ）て と云釈ハいかゞあらん 時をさへのこりたる俗ハ
さあらず我のかけぬ時なと有てよく其初をつとめていふなり俗さ
俗あるこの意ハもし早疾ポ乃字をとくとよむまゝとくを初めてつとめてさ
て疾（とく）と云ふならん上ハ事を通りてつとめて下ハとくめてと下略して
云ふ又下ハ時を略して疾時（つと）といふ訓ありたる詞ゟ猶と付てつとめて入来
てなど云も初もとり帰人ポ勤（そ）ぞあるべく状（さま）を云て疾と云義のと思ゆ
きてめとハ向（むき）乃義にもあるべし人を賤（おと）しめいやしめなどいふなるひもこの
世と云ふもひとつこゝろなるべく云ふ事を述て此ところをいふ語ハ夙旦（しうたん）乃義

ともなり又略しては勤行（きやう）乃義ともきこゆべし
一 庭の倉ありとめて去りかば物ふたれバ　此ことばハ俗云まゝ乃語字な
るを古本に俗とありつまて箱のうへかくいひたれども古本乃ありさま語字
ハ法俗なく事字（さな）も二つ三つまう同じきこえ尽なるをこて乃こと様けていひも
すしハいぶかし
一 津國ゟ領所（しりところ）ありけり　下の詞にも津の国菟原郡あしや乃里ゟ
未婚らしていまて住をりとみえたる物がたりなれば かくいへるハ其由ありてある
ゆるべし 初めの詞にもならの都春日の里にしるよしして狩に 是ハ郡作ポの
御父阿保親王ハ平城天皇の第一乃皇子也 天皇此ところを嵯峨天皇ゟ
譲りまして平城（なら）乃旧京ゟおはしましてなど此ゆへなどの有て在原氏乃領じ
たまふ地も有し故なくともなさるいはれ乃ありて此所を領じたまひし事なるべし 傳ニ云親王素性
謙退才兼文武有膂力妙絃歌云云 業平ハ日橘乃逸勢仲律の徒等が陰謀
をあらはして忠誠をわびしたまひし功によりて一品に任ぜられしきこえあり

ゐるなりとぞいふ　されどこれは世にも功村など所々にしるしあり和
語抄にはくいなくいなを初めとして多津の忌部兎原二郡のあひだ
なほ此乃領ぎらきて地もありしやくも芦やの邨なりとおぼしき里と
あるハ阿保山親王寺らふ仏字あり仏字の腐所しるしとなりて文たゝ
り行年ゝのるものにあるてこの忌部麿ハいとしるもそゝるハいづれ
よくていとて住なりとぞいふ其うしなくてハあらじ

一伊勢乃いつさ郡名の物ぐりの条々の中にいつゝのみやこうぐ又杉子
なぐ名をさへ仏りものゝてあるにまりて女一人乃うへあらずと弱ハいとれ
しを或人ていもとより一人乃物ぐりを伊の条々にあるをしおとらへり触
えくうり一人の於なるぐきの与り二階后のねぐりとおぐりも多度の猫ぐを乳
し或ハもゝに条を溜ゝ又所くうり夫ハゝ伝ゆとおもひをなどゝて仏りな
きゝを乃至ハ年より人ひとりの上ゝて且伊勢物ぐりの中にゝし入ゝゝり
きといきのどせうゝをぐゝとべくもあるゝ女のおゝりをおもひゐる男ハ

乃てもに八ゝゝ行ゐ夜の中に桂乃ぐゝ考ゝぐ有ける又次ゝ男ゐるこゝゝゝ山ハ
溜てゆどゝ多ゝ多をも泡をもゝれバこの笠武ゝ毎日乃下りて考ゝ有りを
おゐゝゝゝゝん物ゝてゝ行を考ゝ国ゝゝ国ゝゝゝゝゝ笠武の条ゝゝ
人乃出ゝるゝゝ考ゝゝ行ゝ齋宮の和乃ゝゝゝゐる車にゝゝゝけゝゝゝも
ゐゝゝでかりつぐゝるゐてゝゝぐゝ齋宮無流をゝゝゝ物ゝ男ゐ行ぐゝ乃ハ
彼をおゐゐあゝゝれてくかくまでハゝゝりけり

一大ゝゝの渡ある人考ぐゝてゝゐ彩条屋ゝゝ里ゐゝゝで乃渡し大渡の松ゝゝも
ゝ伊勢人てきゝゝりをにゝてゝれもゝゝ伊勢の国ゝハ名ある所ゝも多ゝをこの
大渡乃渡をゝゝ条度も出ゝしハむゝしいつゝの条ゝゝゝゝゝゝゝ八無条村ゝゝ
ぐけあり行ゝくゝてあをバ近ゝゝゝ乃名もゝゝ生ゝ行ゐハゝる記ゝのんぐゝ
かゝゝゝ男ゐ

一伊勢の国ゝ欲浮ゝゝゝゝんゝあ歌古事乃文をおゝて伊勢ゝゝ云ハ右乃文条
ゐゝりをゝゝハゝゝぐ考ゝ国ゝ大渡ゝゝ詞をゝゝれバなゝんゝ名国ハゝゝ行ゝゝお

にハ伊勢乃宮乃時をいでてはきんとふるきを聞しか是ハ或説乃ごとく文の面乃まゝ
う読つゞきてうちさきんと思ひきり男乃心つくりいそぐとそふさし共うち
柱てよそなくつらいんよりハ乃ところいくやすきやうなくつら将とゞつくにらん
ふべし

一 喜撰より打すゝる乃はじめしつまなくバ　此哥読く乃説も心ゆかずとゞくう
記者の伝さるべきもの歌もし東乃南波千ましもちのひもはらきんハかひさ
あらじなど有しを字てつくしゞハあらめくのらバひとつびさへつまなしを
なるバ波乃みち千如（スコト）そがらさそ人ともかひそあらじものをとゞまへころえ
やはしこハおひそおうら試るといふのと

一 山乃くなうはりてけふあらすハ　或人うれしくといふを字だぐん
しかといへり人ゝきてなど云にて打すへバ是も一説とすべし

一 ぜじ乃ことは　吉備の国人乃春湊浪話と云書に伊勢物語より山科
乃禅師親王と申奉るをバいつれ乃抄物にも仁明天皇之皇子人康親王の御

事と注せり是ハ天安二年十一月十四日女御多加幾子身まかりたまひしと（紀ハ本年の三代実録に見ゆ）
三代実録に見えたり則七七日乃法事を安祥寺にてしたまひし時のことなりしこの時ま
禅師乃親王と申ハ同書乃見えて清和親王の御事なりしこの親王乃御子大江谷
御（西宮記六年…善淵とあり）貞観四年十二月廿七日（又二十五日）乃奏云に禅師親王と書てまふり
紀三代実録に見えたりしかバおぼつかなくもあらずそれ人是ハ阿保親王乃兄に
こそて業平乃叔父なりバ（高岳親王ハ平城天皇の第三子にて業平ハ阿保の第二子なれバ叔父の字あたれり）しくしも集くるいはれ
あり又云嘉和二年落飾貞観三年入唐元慶五年唐にて遷化ましましたる真如親王と
も蹲踞（ソンゴ）太子とも申しし小栗栖（をぐるす）に住てありけるの何によりて伊勢物語にかかり
山科乃隣村なりバ山科乃禅師とも申すにもありしや又人康親王を禅師の王と
ちかきの西史又ハ三代実録貞観元年五月五日出家まうし御事ふらがみハ三代
実録に見えたり云禅師親王のようなるハよく考へみるに然とも此文乃論年
乃バ業平よりいちがひて時代乃証もなきもののしこる下
にも俗なる禅師なると云文を打ち人禅師とハおぼゆ親王乃人をさすものぞ

諸王太子などや　緯(?)乃ならびにはあらねど法親王などの称をもてある
るなし　小栗栖とかいふところに山ぶみにすませ給ひし高家人
康のつきの法くにたちもさらずめでたうける歌をよむところまなびなるべし
一　めでつくづくしひておつる　法りいはれなりゆきてといはず散の花
まれともいへどもそのほどに今はの命の中に花をおしてのちより孫びろくておくれる
にはなし人乃こころえぬことなしすべて昔はかくぞ有けるさまをおして撰べる時
やまひの法ぐも四月日雨乃降るより散の花をおしてくさつかうしたる古今集の詞もし
こ秘を似りくちぐちなるが撰者の万葉し今の世乃人は詩歌の細やかをえ見ば
此撰集の例文は和の字の家の日記などよりかいてぞめあきらかなるまでにして
人々終ることもおしいかざるべし
一　我みかど六十余国　万葉に紀貫之も書のことくかなり撰の序は
家門を称するを撰びて勝くる御乃検りは家門乃内ぞと云義也　都乃
孝徳乃詔に我日本誉田天皇乃世よりこれを引きしもそのまま[illegible]を

こかまちこちつみとめるもはきよしすめらみこととなへたてまつるさんは恐し
とて家つこ中であがめたてまつりし古くし乃天子を陛下と申すも同じ
義し
一　こかみ世　万葉に高く日に家は死するこの世川きよくみ月
日へりけり古きはこの世にいもあばうつろみなき河ありかよひて高くすら細
を　みるを川ありてゆくみなくてこそはあり家手をたえぬと私もなるの
川乃水脈一すぢ地下をゆきて又下流を流れていちなる者
てのみなくてこそとはちるなは水なし川乃名義なるべし　水生とも書きて
論ぎられしかど類聚国史日本紀略などには水無瀬乃生瀬水成瀬とも
書しもあれば生成とかはりなの意はいはれのとふて義なきとおぼゆ
一　ひくせうり出でつびきくら付君ましてば　古事に君朱者とありさては
哥乃ころおくり和ち乃すき人ちるをこそみて君をてばの方天の河ある
地をつきて雨きよし　はてのあ乃ものゝ歌乃中に君家とむて秋の[illegible]

[illegible]る氏名乃豊家あり昔維盛の祈る遺猶乃[illegible]を[illegible]せてそして此
氏名を[illegible]しとゞかりてこゝに其枝流の人今彩[illegible]信くかたちき

一あしの屋れ激の塩やきいとなみ
きゝわけぐとりつゝてむすめ乃者しと他まゝぶ汚ぬしとつきれり於強云
[illegible]ろんして其年の[illegible]ハ櫛笥乃ふ[illegible]ろもろ乃なくいとゝあるハちゝ
[illegible]なれ捨て来てゝ[illegible]ハ蛍をゝあらがなゝわぶを[illegible]ハとも[illegible]なれ
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ

一 こぞ ちの まいて あ侍 ら 流 と せ ば ら う

一 天 乃 さ か を ま ち る 或 御 流 と し 源 す 侍 る ハ 或 書 う さ か を と ハ を

を 拾 う 末 わ ど 書 を ち ひ さ く う を を と ま ま り い る 人 乃 な ら ひ う

吉 年 ニ ハ 末 ほ ど ち け く う ち 四 年 に ハ 末 わ ど ち ひ さ く う ち ら ど 神 ニ 詣

て 祈 る 参 ら ん ど 今 已 か 吉 な る ハ 奇 成 乃 ら ど り に も 侍 ま ハ 幸

福 あ ら せ ま ま て か ら は を ま ふ を 拾 う も ま を 大 け く う ち て 吉 年

を 祈 ま し 出 て か ら を ま ま ふ 詣 ま て 堅 石 を て ふ を 約 め て ひ く ま ま て か て

拾 ひ ま る 所 由 し 相 を ま ら ま ま ま ま ま ま ま ま ま ま ま ま ま ま ま ハ 指 を 乃 字 を 吉 年 記 る

天 逆 を 矣 杙 書 紫 垣 打 成 而 陽 や ま ま ハ 書 ま ま 垣 ハ 即 枯 ま を ま し 相

ま ら ど ま ま う 肖 て ま う 仕 と の 係 く る 拾 ま し 仕 ま を 沙 参 理 金 れ

乃 後 ま う 知 あ る 人 ら ま ま の ま ま て ひ ま る の と ま ま え ま ま ま ま る ま

所 ま く と の て ま 人 る ま て い ま を か ま く ま ど り 侍 る の ま る ま ど し

一 い ま ま 侍 る の を う 男 ひ ま る ま を り ま の う ま 侍 ま ま ま で

ま た ま ま ま ま で き 物 ま ひ ま く 死 人 し な ま れ ハ 幸 ゆ 乃 こ の 四 ま

の を 行 な ど ま ハ ま ま し い う ま る 事 を ま ま ま ひ ま を り ま ま ま れ ハ

ま ま ま ま ま じ と の ま れ を 第 ハ ま ま と い ま ま ま 教 を ま ら て い ま ん ま ま

る ま 侍 ま な き ま ど な ま て ど 侍 ま ニ 或 人 の 流 ま 他 ま 侍 い ま り て

已 り 下 情 を ま ま を ま ま と 人 侍 ど か ま て ま ま ひ ま る か ま 人 る ま の 有 ま

ま ま ん 侍 源 を し も 終 る 乃 修 の ま る 生 ま ま ハ 奇 ま 記 ま 乃 ま を ま る い ま せ

る ま る ま ま ま れ 知 学 び て 才 ま る 人 乃 ま 叶 ま り 行 ま ま ハ 我 者 二 奇 敏 と い ひ ま る ま

ま ま ま ま ま ま ま ま ま ま ま ま ま ま ま

[illegible]

加茂真淵翁記

上田秋成御記

安政三丙辰年十月十九日於淺草天満宮前浮世

江戸芝神明前　岡田屋嘉七
同日本橋南壹丁目　須原屋茂兵衛
同日本橋南貳丁目　山城屋佐兵衛
同中橋廣小路　西宮弥兵衛
同淺草茅町二丁目　須原屋伊八
京本能寺前　錢屋惣四郎
大坂心齋橋南壹丁目　敦賀屋九兵衛
同　敦賀屋彦七

三都發行書肆